

「悔い改める」

ルカの福音書 13:1~9

はじめに

聖書にはたくさんのたとえ話が記されていますが、明確にたとえとしてではなく、比喩的な意味を持った「ひな型、型」として記されている実話、事実も数多く存在します。たとえ話についてはもちろんのことですが、これらの実話にも同様に「神の国の奥義」が秘められていると私は考えています。今日もそれらのいくつかについて考察してまいります。ご一緒に見て、思い巡らしてまいりましょう。真理の御霊の導きと助けがありますように。

1. ガリラヤ人の血

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:1 ちょうどそのとき、人々が何人かやって来て、ピラトがガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた、とイエスに報告した。

13:2 イエスは彼らに言われた。「そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだと思いませんか。

13:3 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

この出来事は少し比喩的に表現されています。事実としては、ガリラヤに住むあるユダヤ人たちがエルサレムに上って来て神殿でいけにえをささげようとしたのですが、何等かの理由でピラトの命によりその場で殺されたというものです。神殿でいけにえをささげる敬虔なユダヤ教徒が殺害されたのです。本来ならば祭司長をはじめとするユダヤ人の指導者たちがこのピラトに対して激怒して抗議するような事件なのですが、エルサレムにいるユダヤ人にとって当時のガリラヤ人というのは同じユダヤ人であっても異邦人と同じように扱われていました（マタイ 4:15）ので黙認、黙殺されたようです。ですから人々はこの事件をガリラヤのナザレ人イエシュアのところに伝えに来たということだと思われま。これは実際に起こった事実として記されていますが、聖書に記されている以上、ましてやイエシュアそのものについて記した福音書に記されているわけですから、ここにも預言的な意味が秘められています。ではこのガリラヤからエルサレムに上って来たユダヤ人がピラトによって殺された、というこの事実を見て、聞いて思い浮かべる人物や出来事はないでしょうか。そのような出来事は一つしかないはず。すなわちそれはガリラヤのナザレから出て、世の罪の贖いのための完全ないけにえとしてささげられるため、エルサレムにおいて、またピラトによって十字架にかけられ殺された御方、イエシュアただ一人です。つまりこの出来事はイエシュアの十字架の死を指し示す「型」となっているのです。ですからここでイエシュアはこのガリラヤ人たちの罪の報いとしての死を否定しておられるのです。本来、人はみな自身の罪のゆえの刑罰として滅びます。しかしイエシュアだけは違います。この御方はまさに「**献げるいけにえ**」としてその「**血**」を流されたのです。ちなみにここで「**混ぜた**」「**混ぜる**」と訳されているヘブル語はアーラヴ(עָרַב)といい、こ

の言葉は本来「保証人となる、責任を負う（創世記 43:9）」という意味の言葉なのです。まさにイエシュア
の受難、その十字架の死は、救われるべきすべての人の罪の全責任を罪のない御方イエシュアが負うとい
うものでした。

2. 悔い改める

そしてイエシュアはこう言われました、「悔い改めないなら…滅びます」と。ここに使われている「悔い
改める」という意味のシューヴ(שוב)は本来、このような意味で使われました。

創世記【新改訳 2017】

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木か
ら食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ること
になる。

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。
あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

これは最初の人アダムが罪を犯した後、神である主が彼に語られたものです。このようにシューヴとは本
来、「大地に帰る」「土のちりに帰る」という意味の言葉なのです。この概念は私たちの日本語の「悔い改
める」とは大きく異なります。つまりシューヴとは本来、言動や生き方を変える「回心（改心）」程度のも
のではなく、全く初めに戻るといった意味の言葉だからです。しかもそれは再び母親の胎内に宿るとい
う形でもありません。以下のようなことなのです。

創世記【新改訳 2017】

2:7 神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きる
ものとなった。

母の胎からではなくこのようにして造られた最初の人アダムは、この時点ではまったく罪のない状態で、
また死ぬことのない永遠のいのちの身体を持っていました。つまりシューヴ「悔い改める」とはいわゆる
回心することではなく、いうなれば「改身、回身」であり、永遠の身体、朽ちることのない肉体に造り替
えられるために、やがて朽ち果ててちりになってしまうような今のこの身体を脱ぎ捨てることなのです。
ですから「悔い改める」とは人の力では決して成し得ません。これはただ神である主の御業なのです。か
つて主は「光、あれ」「大空よ、あれ」「水よ、集まれ」「地は植物を芽生えさせよ、生き物を生じよ」など
と命じられ、主の命令、主の御言葉によって世界は始まりました。ですからこの「悔い改めなさい、悔い
改めよ」というこの命令も、必ずそのようになる、生じるのです。

かつて私はこの悔い改めるという言葉の意味を誤解し、罪を犯さないように、主に喜ばれるようにと努
力していました。しかし実際には悔い改めても悔い改めても何度も何度もまた同じ罪を繰り返し、一つの
罪も犯さないように改めることができませんでした。そしていつしかこの言葉は私を責める言葉となり、
そして人をも責める言葉となってしまいました。このようなことは皆さんもきっと経験しておられること

でしょう。実際「悔い改めよ」と聞くたびに、心が刺されるようでした。しかし主は、イエシュアは、わたしがそれをする、わたしがあなたのその身体をやがてちに帰し、そして朽ちないものとして新しく造り、そこに再び「いのちの息」を吹き込み、「生きるものと」ならせる、すなわちよみがえらせるという約束として、この御言葉シューヴについての神のご計画を語ってくださいました。ですから今私はこの「悔い改めなさい」という御言葉を良い知らせ、福音として受け取り、アーメン主よ、信じます、どうぞお言葉どおりこの身になりますように、と答えることができますから感謝します。ですから私はたとえ今のこの身体が衰えても傷んでも失望しません。シューヴ、本当の意味での「悔い改め」の主の御業が成就する日が近づいている、そして聖書に預言、約束されたよみがえりの日が来るのだと思うようにしています。皆さんもぜひそのようにお考えください。ではこのシューヴ「悔い改め」の成し遂げられた日、すなわちよみがえりの日の預言を聞きましょう。

I コリント人への手紙【新改訳 2017】

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

主イエシュアの空中再臨、教会の携拳とも呼ばれるこの出来事、この奇蹟、まさに神である主の御業が起る時、私たちのシューヴ「悔い改め」は成し遂げられ、「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」。そして空中で、天でこれが成る時、地上においても、もう一つのシューヴが起こります。それが次のイエシュアのたとえにあります。

3. エルサレムの十八人

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:4 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いませんか。

13:5 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

先の事実にひもづけて、イエシュアは過去に起こった上記の事故を取り挙げておられます。先ほどはガリラヤ人の死についてでしたが、ここではエルサレムの民の死が語られています。そしてその数は「十八」人であったと。実はこのルカ 13 章にはこの後にも「十八」年も病の霊につかれ (13:11) 「十八」年もサタンに縛られていたという女性が登場します。つまりこの十八という数は偶然ではなく、秘められた意味があるということです。ではこの十八という数が聖書で最初に使われた箇所を見てみましょう。

士師記【新改訳 2017】

3:12 イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行った。そこで主はモアブの王エグロンを強くして、イスラエルに逆らわせた。彼らが主の目に悪であることを行ったからである。

3:13 エグロンはアンモン人とアマレク人を彼のもとに集め、イスラエルを攻めて打ち破った。彼らはなつめ椰子の町を占領した。

3:14 こうして、イスラエルの子らは十八年の間、モアブの王エグロンに仕えた。

これはエジプトからカナン¹の地へイスラエルを連れ上ったモーセ、ヨシュアを知らない世代が起こった頃の話です。「イスラエルの子らは十八年の間、モアブの王エグロンに仕えた」とあります。その理由は彼らが「主の目に悪であることを重ねて行った」ためとあり、そこに聖書で最初の「十八」という数があります。このように「十八」とは墮落したイスラエルが異国の支配を受ける、その奴隷となるという意味を持った数なのです。ちなみにこの時イスラエルを支配した「エグロン(עגרון)」はエーゲル(עגל)「子牛」という意味の言葉を由来とし、そしてそれは本来、イスラエルが初めて偶像礼拝を行ったあの忌むべき「金の子牛(出32:4)」を指し示す言葉なのです。つまりこの「エグロン」とは人となった偶像、すなわち自らを神とする人、いわゆる現人神(あらひとがみ)を意味し、その実体は終わりの日に現れる悪魔サタンの子、黙示録の獣とも呼ばれる反キリストを指しています。ですからこの「十八」という数には、エルサレムの「十八」人が死ぬというこの出来事には、大患難時代とも呼ばれる終わりの日、エルサレムは獣、反キリストの手に落ちる、獣に支配されるという事実が「型」として指し示されているのです。そして次にイエシュアはさらなるたとえを用いてこれを強調されます。

4. ぶどう園のいちじく

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。そして、実を探しに来たが、見つからなかった。

13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』

13:8 番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。

13:9 それで来年、実を結べばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』

「ぶどう園にいちじくの木を植えておいた」これはなんともおかしな話ですよ。普通ぶどう園に植えるものは、言うまでもなく「ぶどうの木」です。しかしここではなぜか「いちじくの木」が植えられています。たとえ同じ果樹とはいえ、ぶどうといちじくとは育て方も収穫時期も違います。まともに育つわけがないのに、この主人は三年もいちじくの実がならないと言って怒っています。さらにこの主人に雇われた番人の行動も不思議です。「木の周りを掘って」とありますが、ここに使われている「掘る」という意味のアーザク(אצק)は本来、ぶどうの実を入れて足で踏み、果汁を搾り出す「ぶどうの踏み場を掘る」という意味の言葉です(イザヤ 5:2)。いちじくに対してこんなものを掘っても無意味です。さらにおかしい

のは「肥料」という意味のドーメン(דָּמֵן)はなんと本来「埋葬されず放置された人の死体」を意味する言葉なのです(Ⅱ列9:37)。ぶどうの踏み場を掘り、死体を置いておく、こんなことをしてあと一年でどうやっていちじくの実がなるのでしょうか。つまりこのたとえは、初めからいちじくの実などならないように仕向けられている、というものであり、それはイスラエルの民が自分で自分を救う、つまり自分たちの力や知恵や正しい行いによって主の目に義とされることなど絶対にならないようにするという神のご計画を表すものであり、むしろイスラエルが自分たちの罪や過ち、愚かさに気づき、主の御前にへりくだり、御名を呼び求めるようになることを意図したもののなのです。

かつてエデンの園において人とその妻は罪を犯し、「いちじく」の葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作ったとあります(創世記 3:7)。これは主に逆らい、主に頼らず、自分たちのために、自分たちだけで生きようとする自己中心の表れです。「いちじく」には本来、そのような意味があるのです。そんな「いちじくの木」が、イスラエルの民が実を実らせることなどありえません。旧約聖書にある彼らの歴史において、彼らは自分たちの力で主の御心になうもの、聖なる民になろうとし、過去二度にわたってエルサレムに神殿を建てました。そして終わりの日には三度目の神殿建設が行われます。しかしそれによって彼らが成功、繁栄することはありません。それどころかこのエルサレムの第三神殿は反キリストの欺きによって獣の神殿と化してしまいます。それが「三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない」というたとえの意味なのです。ちなみにイエシュアが十字架の死によって三日の間葬られた、三日間死んでいたということもまたエルサレムの第一、第二、第三の三つの神殿が失われ、奪われる事実を指し示しているのです。しかしイエシュアがその三日目によみがえられたように、イスラエルもこのままでは終わりません。ではもう一度、先ほどのぶどう園の番人のとった行動を見てみましょう。

「木の周りを掘って、肥料をやってみます。」先ほど述べたように、「掘って」「掘る」という意味のアーザクは「ぶどうの踏み場」を掘ることを意味する言葉です。このぶどうの踏み場について、このような預言があります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

14:14 また私は見た。すると見よ。白い雲が起り、その雲の上に人の子のような方が座っておられた。その頭には金の冠、手には鋭い鎌があった。

14:19 御使いは地上に鎌を投げて、地のぶどうを刈り集め、神の憤りの大きな踏み場に投げ入れた。

14:20 都の外にあるその踏み場でぶどうが踏まれた。すると、血がその踏み場から流れ出て、馬のくつわの高さに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

これは王の王、主の主であられるイエシュアが地上再臨されるその時、この御方によってイスラエルに敵対する獣の軍勢を一切の情け容赦なく打ち滅ぼすことを預言したものです。まるでぶどうの汁のように敵の血が流されるために、その返り血でイエシュアは「血に染まった衣まとう」とも預言されています(黙19:13)。このように、ぶどうの踏み場を掘る番人とは、地上再臨される主イエシュアを表しているのです。

そして先ほども述べたように「肥料」ドーマンは放置された死体を意味する言葉であり、上記の預言とその意味が見事につながります。この言葉の初出も見てください。

Ⅱ列王記【新改訳 2017】

9:36 「これは、【主】がそのしもベティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イスラエルの地所で犬がイゼベルの肉を食らい、

9:37 イゼベルの死体は、イスラエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれもこれがイゼベルだと言えなくなる。』

これは北イスラエル王国をバアル礼拝によって墮落させ、夫であるアハブ王を操り数々の悪行を犯したイゼベルという女のその死の場面です。彼女は高所の窓から突き落とされて死に、上記のようにされました。終わりの日、反キリストも再臨のイエシュアによってその絶大な権威の座から叩き落され、生きたまま燃える火の池にまで落とされます。その事実、神のご計画を指し示す言葉がこの「肥やし」ドーマンなのです。このようにイスラエルは自分たちの力や行いによってではなく、「ぶどう園の番人」である、彼らを反キリストの脅威からこのようにして救い出される主イエシュア・メシアによって実を結ぶようになるのです。そしてそれはイスラエルの国家としての死、ちりに帰るという意味でのシューヴ、イスラエルの民族的な「悔い改め」のなる時です。しかし主はこの民、この国を救い出し、再びよみがえらせます。こう預言されているとおりです。

アモス書【新改訳 2017】

9:11 その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起こす。その破れを繕い、その廃墟を起こし、昔の日のようにこれを建て直す。

9:12 これは、エドムの残りの者とわたしの名で呼ばれるすべての国々を、彼らが所有するためだ。——これを行う主のことば。

9:13 見よ、その時代が来る。——主のことば——そのとき、耕す者が刈る者に追いつき、ぶどうを踏む者が種蒔く者に追いつく。山々は甘いぶどう酒を滴らせ、すべての丘は溶けて流れる。

9:14 わたしは、わたしの民イスラエルを回復させる。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作って、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作って、その実を食べる。

9:15 わたしは、彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが与えたその土地から、もう引き抜かれることはない。——あなたの神、主は言われる。」

「よみがえる」ことをヘブル語でクーム(קוּם)といますが、この言葉は「ダビデの仮庵を起こす」「その廃墟を起こし」という預言にも使われています。つまり、よみがえり、復活とは一人の人が朽ちない身体に変えられることと、一つの国すなわちイスラエルが国家として再興され、「彼らは、わたしが与えたその土地から、もう引き抜かれることはない」という終わらない国、永遠の御国となる、永遠の身体と永遠の御国という二つの意味を持っているということです。

このように、今日の内容を振り返りますと、ピラトがガリラヤ人の血をいけにえに混ぜたという事件は、イエシュアの十字架の死を指し示した比喩的な出来事であり、シロアムの塔が倒れて死んだエルサレムの十八人の事故とぶどう園のいちじくの木のとえは、大患難のイスラエルおよび再臨のイエシュアが指し示されているというものでした。そして何より今日のタイトルであります「悔い改める」とは、人の死とよみがえり、永遠のいのちの身体を指し示し、そして廃墟となったイスラエルを再び起こし、これを再興、再建し千年王国、メシア王国とも呼ばれる「神の国」を完成させることを意味する言葉であるということをご覚悟ください。

最後にシューヴに使われている三つの文字の意味を述べますと、噛み砕く「歯」を象ったシーン(שׁוּב)、**「掲げる、定める、固定する釘」**を象ったヴァーヴ(וּב)、そして「家、国、国民」を意味するベート(בּ)、これら三つの意味を組み合わせると



「噛み砕かれ、粉々にされ、ちりに帰る。しかし天から降られる御方によって国、国民として建て直され、(この王国は永遠に終わることがない)。」

というような意味となり、イエシュアによってなされる神の国のご計画がこのシューヴという言葉に秘められていることがわかります。このように「悔い改める」とは人の行いなどではなく、イエシュアによってのみ成し遂げられる神のご計画を指し示す言葉なのです。この事実以外に救いはありません。ですからイエシュアは「**悔い改めないなら、みな同じように滅びます**」と言われたのです。まさにこう記されているとおりです。

使徒の働き【新改訳 2017】

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、**私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。**

「救い」それは私たち教会にとってはよみがえり、そして携挙です。そしてイスラエルにとっては国の再興、そしてイエシュアによる地上の統治です。これ以外に「救いはありません」。ですからただこの救いのなる日を求めてまいりましょう。